令和６年度　愛野こども園施設自己評価結果

総合評価　A

１　評価項目の達成及び取組状況

評価対象	結果	理　　由
（1）　幼保連携型認定こども園の教育・保育に関して	A	**教育・保育目標** **「知恵と力を出し合って生き生きと遊べる子」** **重点目標** **「からだづくり　こころづくり　なかまづくり」** ・園児との信頼関係を十分に築き、園児が安心して身近な環境に主体的に関わり、試行錯誤したり、考えたりするようになる教育・保育の実践に努めることができた。 ・教育・保育をとおして育みたい資質・能力を共通にし、指導計画に位置付け、実践する中で学期ごとに考察・反省を繰り返し、指導計画を見直すことができた。 ・行事の開催や地域の人や他園との交流を少しずつ増やしてきた。幼児期に大切にしたい人や自然との交流を前年度よりたくさん実施することができた。 ・幼児理解に基づいた指導計画の作成、保育実践、反省を基にした改善をＰＤＣＡサイクルで捉えて行うことで、子どもたちの心の豊かさ、たくましさの育ちを促すことができた。職員の努力の成果であり、保育者自身の質の向上につながった。 ・南の丘学園研修会に参加したり、南小との交流も年長児だけでなく年中児も体験したりすることで小学校へのスムーズな移行や幼小一貫教育のへの職員の関心が高まった。

（2）　保育の実践力に関して （研修を含む）	A	・主体的に生活できるよう、個人差を踏まえながら一人一人に適した援助に心掛けることができ、自己肯定感を育む実践につながった。また、特別支援を要する幼児への支援の難しさはあるが、一人一人と向き合う中で、支援の方法をつかみ、保護者と連携をとりながら対応することができた。 ・幼児が自らの興味や関心に基づいて、自発的、主体的にかかわろうとする環境を計画的に用意したり、日頃から慣れ親しみ安心できる環境に心掛けたりして、生活全体を充実させることができた。 ・外部研修は、集合研修が増え情報交換をしたり、実技を学んだりし保育力を高める機会となり、職員の新たな学びにつながり、保育実践に活かす努力をするようになった。リモート研修にも積極的に取り組みたくさんの研修を受けることができた。 ・園内研修では、他学年に入り保育を間近で見ることにより保育方法や幼児理解の学びとなった。保育部は「環境構成について」学年毎発達段階に合った環境構成の研修をし、子どもたちの発達を促すことができた。
（3）　教諭としての資質について （能力・良識・適性）	A	・幼児の主体性を大切にした保育のあり方を考え合い、幼児の思いに寄り添った保育実践に努めることができ、職員間で園の教育方針を共通にして進めることができた。 ・研修や会議等で、進んで意見交換したり、傾聴したりして新たな学びを保育に活かす努力をすることができた。 ・常に衛生面・清潔感を意識した身だしなみに心掛け、子どもたちの手本になれるような保育姿勢を築けた。また、言葉遣いに自ら気を付けることができ、子どもたちにとって正しい言葉の習得になるようにした。 ・提出物の期限を守って保育準備やお便りの作成、指導案等の提出ができた。 ・保育室の環境では、壁面の作成や制作物等季節や発達を考えて実践した。行事の見直しにより秋の自然物活動等時期を捉えた保育内容や環境への意識が高まった。 ・室内の整理整頓は、中には苦手な教諭もいるが、避難経路の確保や棚の上に重い物を置かない工夫等ができた。
（4）　教諭同士のティーム力について	A	・教育部・保育部共に他学年の職員との連携に努め、行事の遂行、日々の保育準備、環境等に協力体制で取り組むことができた。 ・役割や担当について、先輩の教諭から方法について聞いたり、自分が経験することで力をつけたりして、学びに活かすことができた。 ・伝達ミスを招かないよう、丁寧に伝え合い、活動等に支障が出ないように努めると同時に、守秘義務を互いに守った。

（5）　保護者との連携に関して	B	・園児や保護者の個人情報を厳守したうえで、面談の実施や連絡帳への記載をすることができた。 ・保護者面談では、傾聴を基本として思いに寄り添ったり、園での様子を伝えたりして、連携がより密にとれるようになった。 ・保護者からの相談内容や、担任から保護者への報告事項について、事前に主幹教諭・園長と内容を共有し、必要に応じて対応の方法を事前に考え、丁寧に対応するようにしたが保護者の要望と園の対応のずれが生じた時があり、面談を重ね理解を得られた。 ・保護者の考え方が多様化しているが、クレーム的な意見はなく、園への温かな理解・協力を得ることができた。 ・全体的には連携が取れているが、経験年数が少ない職員にとっては対応への不安が大きいようであった。
（6）　地域との連携に関して	A	・園外保育等で出会った地域の方に進んで挨拶を交わすことができた。また、地域の人のご厚意により田植え・稲刈り・さつま芋のつるさしと収穫・大根の収穫等、園内では体験できないことを経験することができ、子どもたちの感動体験に繋がった。 ・職員一同、地域に根差した園であることの共通理解を図り、進んで地域の方にかかわったり、地域の自然環境を生かした園外保育に心掛け、園児に楽しませたりして心身の豊かな発達を促すことができた。教育部は、園外に出掛ける経験がたくさんできたが、保育部も新しい園外保育場所を見つけ積極的に出掛けることができた。
（7）　危機管理能力について	B	・園児の安全と安心を第一に保育室等の避難経路や災害発生時の対応を考え環境を整えた。 ・緊急事態が発生した場合に、咄嗟の判断が求められる。職員が連携のもと、毎月の避難訓練でも様々な状況を想定し臨機応変に対応できるよう訓練に努めてきた。 ・ヒヤリハットを実施するようになり、保育者の安全面への意識が高まり、怪我の発生やかみつき等が減少した。 ・嘔吐処理の方法や簡単な怪我の対応の仕方をどの職員も身に着けることができ、他の職員と連携しながら対処できるようになってきた。 ・「れんらくアプリ」による登降園の確認を３段階のチェックにより、園児の未連絡者への対応を徹底し、園児の所在を明らかにしている。 ・今年度、水道管部品の破産による保育部浸水が発生したが、職員の努力と近隣の学校に道具を協力してもらい教育部は１日、保育部は２日の休園で再開することができた。

2　総合的な評価結果

結果	理　　由
A	・認定こども園の教育・保育に関すること、保育者としての資質、保育者同士のティーム力は、職員の意識が高く今年度は自分から多くの研修を受け、対応力が身に付き、自己発揮できているものと評価できる。今後も、連携を大切により園児の成長を促すための取組に力を入れていく。 ・保護者との連携、地域との連携については、保護者の価値観の多様化による対応の難しさがあるが、保護者に寄り添った連携に努め、子どもたちの発達のために連携を取ってきた。地域とのかかわりも、園外に出掛け地域の良さを生かした教育・保育実践にさらに努めてきた。 ・危機管理能力については、毎月の避難訓練において様々な想定をし職員が臨機応変に対応できるように訓練をしてきた。園児の登園確認については、クラスに iPad を配置しチェック体制を強化した。浸水被害の対応でも職員が協力して早期の保育再開に取り組むことが出来た。

3　今後取り組むべき課題

課　　題	具体的な取組み
・保育の実践力について	・一人ひとりの主体性を大切にした環境構成や支援方法等クラス運営のあり方を、職員が主体的に考えていけるよう、さらに外部研修や園内研修で保育力をつけていく。 ・大学や短期大学とも連携を強化し、スマート教育実践に向け職員も研修をしていく。
・保護者との連携について	・保護者の対応が多様化しているため、担任だけでなく園長、主幹教諭、学年主任などと情報共有し、一緒に対応にあたるようにしていく。 ・保護者アンケートから園に協力したいという意見もあったため、教育活動に保護者の力も取り入れていきたい。
・地域との連携について	・地域の自然環境や人材を生かした保育を展開できるように、情報収集をしたり園から働きかけをしたりしていく。来年度も企業に「子育て講話」に出掛けたり、園外保育に出掛けたりして連携していく。
・危機管理能力について	・今年度のように予期せぬ災害が発生した時に対応がスムースにできるように業務継続計画を作成していく。

浜松学院大学付属愛野こども園　園　長　　田　代　直　子

4　関係者評価委員の意見

A 委員
・（7）「危機管理能力について」のところの登降園管理については、今年度から各クラスに ipad を導入し、担任、事務、最終確認者の三重にチェックをしている。打刻を忘れた場合には、自動返信メールとともに必ず各家庭に電話連絡をしており、第１連絡先が繋がらない場合は、第二、第三の連絡先まで連絡をしているとのこと。しっかり連絡や確認をしていただいて安心である。
　また、（5）「保護者との連携に関して」の評価が B になっている。保護者対応は難しいところがあるのは分かるし、先生方が一生懸命対応していると感じている。しかし特性のある園児について、そのことを保護者に伝える時の方法や伝え方について、不信感を持つことがあった。こうしたことがないよう、講習等するのもよいと思う。保護者から不信感を持たれることがなくなりもっとよい関係が築けたらと思う。

B 委員
・（5）「保護者との連携に関して」、園でのことがよく分からないこともあるので、伝え方で捉え方が変わることがあると思う。友達とのトラブルなどがあったときは、保護者に伝えてほしいと思う。

C 委員
・(2)「保育の実践力に関して（研修を含む)」について、研修に職員が積極的に参加し、前年度より研修回数が増えたとのこと。職員が自発的に参加しているのは良いことと思う。リモート研修の参加費を園の研修費で賄なっていることもあり、仕事にやりがいをもてるような雰囲気づくりは大切と思う。

D 委員
・開園から１０年余経過してようやく総合的な評価結果が A となったことは喜ばしいと思う。

E 委員
・総合的な評価結果は、これまでずっと B であった。
　A 評価でよいと思う。

A・B・C・D・F 委員
・総合的な評価結果は、A でよいと思う。

令和６年度　浜松学院大学付属愛野こども園運営委員会委員名簿

NO	氏　　名	住　所	委員の要件	該当号
1	田　代　直　子	袋井市	愛野こども園園長	委員長
2	山　本　淳　司	袋井市	愛野地区コミュニティ代表	第３条 第３号
3	吉　崎　成　夫	袋井市	愛野地区コミュニティ代表	第３条 第３号
4	坂　田　温　志	袋井市	浜松学院大学短期大学部教授	第３条 第１号
5	清　水　雄　太	袋井市	浜松学院大学助教	第３条 第１号
6	岡　崎　和　弥	袋井市	愛野こども園保護者代表 （保護者会会長）	第３条 第２号 新任
7	大　場　一　生	袋井市	愛野こども園保護者代表 （保護者会副会長）	第３条 第２号 新任
8	榛　葉　和　弘	掛川市	愛野こども園副園長（兼事務長）	第３条 第４号
9	太　田　由　佳	浜松市	愛野こども園教頭	第３条 第４号